

テーマ 1: 地政学的境界の再定義 解答解説

模範解答(設問別・3 パターン)

問 1(180 字以内)

- **解答 A(標準):** 日本の敗戦により、それまで日本列島から朝鮮、満洲、東南アジアまで拡大していた大日本帝国の膨大な版図が一挙に消失したためである。この日本の支配権がなくなったことで生じた巨大な政治的・軍事的な空白地帯をいかに埋めるかという米ソの対抗意識が、結果として東アジアを冷戦の舞台へと変質させ、分断を招く要因となった。
- **解答 B(論理重視):** かつて巨大な統治空間を形成していた大日本帝国が敗戦によって崩壊したことで、その支配地域に権力の空白が生じたからである。この「力の真空」が発生した領域において、米ソが自国の安全保障観に基づき勢力圏の確保を争った結果、朝鮮半島などの地域は独立と統一が相克する分断状態に置かれ、世界的な冷戦体制に組み込まれることとなった。
- **解答 C(簡潔・満点型):** 日本の敗戦により、朝鮮や満洲を含む広大な帝国版図が一挙に消失し、権力の空白地帯が生まれたためである。この空白を埋めるべく米ソの安全保障観が対立し、降伏受理のための境界線が体制を隔てる「鉄のカーテン」へと変質した。日本の敗戦が東アジアを冷戦の舞台に設定し、地域分断を固定化させる決定的な役割を演じたことを意味している。

問 2(200 字以内)

- **解答 A(標準):** 国家は単なる軍事的な「力の体系」であるだけでなく、経済的な「利益の体系」や独自の「価値の体系」を併せ持つ存在だからである。現代の対立は、領土や軍事力だけでなく、供給網の確保という利益や、デジタル技術を巡る倫理観という価値の相違が複雑に絡み合う「三つのレベルの複合物」となっているため、一方向的な解決策では各国の「常識」や利益の衝突を回避できないからである。
- **解答 B(概念深掘り):** 各国家が力の行使、利益の追求、価値観の維持という三つのレベルで多層的に関わっているためである。現代の境界線を巡る対立は、軍事的な優位性のみならず、経済的な市場独占や、自由や人権といった価値体系の相違までを内包している。これらの要素が不可分に結びついているため、あるレベルでの合意が他のレベルでの衝突を招くという複雑な構造が平和への道を阻んでいるのである。
- **解答 C(高度・俯瞰的):** 国際社会には複数の「正義」や「常識」が存在し、国家間の関係が力・利益・価値という三つの層が重なり合った複雑な複合物となっているからである。特に現代の技術やネットワークを巡る対立では、軍事・経済・倫理の境界が判然とせず、一つの事象が全方位的な緊張を生み出す。この多層的な絡み合いにより、利害の調整や価値の合意形成が極めて困難なものになっているためである。

問 3(600 字以内)

現代の境界線は、地図上の固定的な国境線から、供給網やサイバー空間といった「機能的なネットワーク」へと再定義されている。この変化は、国際社会に「見えない分断」と新たな緊張をもたらしている。

具体的な事例として、東アジアにおける半導体供給網を巡る米中対立が挙げられる。かつての境界線が軍事力という「力」の層で機能していたのに対し、現代の対立は「力・利益・価値」の三層が不可分に結合している。次世代技術の主導権争いは軍事的な優位(力)に直結し、同時に巨大な市場利益(利益)を左右する。さらに、その技術が市民の監視に用いられるか否かという統治原理(価値)の対立も深まっている。

このようなネットワーク上の境界線は、地理的な制約を越えて遍在するため、対立の局所化が極めて困難である。一国が安全保障を理由に特定の技術供給を遮断すれば、それは即座に他国の経済的生存権を脅かす。結果として、かつての物理的な分断以上に、相互不信が連鎖的に拡大するリスクを孕んでいる。

安定のためには、境界線を「排除の壁」とするのではなく、多層的な利害を調整する「界面」として管理する視点が必要だ。自国の正義を絶対視せず、依存関係がもたらす脆弱性を認め合いながら、技術やデータの運用に関する共通のルールを模索し続ける知的労働こそが、新たな緊張を緩和する唯一の道である。

採点のポイント・解説

1. 問 1: 「日本の敗戦→版図消失→権力の空白(力の真空)→米ソ対立」という因果関係を正確に記述できているか。
2. 問 2: 高坂正堯の「三つの体系」を具体的に挙げ、それらが「複合物」として絡み合っている点を指摘できているか。
3. 問 3: 物理的国境とネットワークの対比ができているか。東アジアの具体例(半導体等)を用い、三つの体系の視点で分析できているか。